

<p>カルナ (Karna) 1章7節</p>	<p>最も哀しく、最も高貴で、最も誤解され続けた英雄の一人です。 クンティとスーリヤ (太陽神) の子。クンティが未婚時代に神から授かった子。 神の子として生まれながら、母クンティによって捨てられ、戦車御者の家庭で育つ。 生まれながら「神に選ばれた者」であったにもかかわらず、「社会に居場所がない」と感じ続けた人。 ドゥルヨーダナだけが、カルナの才能を真に認め、王位と友情を与えた。カルナは**「人生で初めて与えられた居場所」**に報いるため、彼の味方として、どんな運命も受け入れると誓う。 母クンティは戦いの前に彼に真実 (あなたはアルジュナの兄だ) を明かす。 カルナは泣きながらも、「母よ、私はアルジュナと戦い、彼を倒さねばならない。でもあなたに誓おう。 五人の息子のうち、あなたは五人を持ち続ける。私だけが死ぬ。そしてアルジュナと戦って亡くなった。</p>
<p>クリパチャリヤ (Kṛpa) 1章7節</p>	<p>王族の家庭教師・軍師・教育者 (バーンダヴァ・カウラヴァ両方を教育) 戦場においても、状況分析・戦略的判断・倫理観の保持という「バランス感覚」の持ち主。 ドローナとともに、バーンダヴァとカウラヴァの両方に武術を教えた師匠。 自らの弟子がやがて戦場で戦い合う運命にあることを知りながら、彼は教育の責任と義務の道を全うした。 感情よりも、正しくあろうとする意思を持っている。 激しさではなく、見守りと分析で支える在り方</p>
<p>アシュヴァッターマン (Āsvatthāmā) 1章7節</p>	<p>父ドローナ。ドローナの死によって怒りで理性を失い、そこからドラウパディーの孫 (胎児=パリークシット) を殺そうとします。 そこをクリシュナが助けた。 クリシュナは怒りの中でアシュヴァッターマンに呪いを与えられた。 「お前は死ぬこともできず、苦しみながら何千年もこの世を彷徨え。額に流血の傷を負い、誰からも理解されぬまま孤独に生き続けよ」 父のために、世界全体を敵に回すような選択。死なないことは祝福ではないという教訓を残したひと。</p>
<p>ヴィカルナ (Vikarṇa) 1章7節</p>	<p>ドゥルヨーダナの弟の一人。カウラヴァ兄弟の中で唯一、「理性と良心を持った男」として描かれる人物。 賭博でドラウパディー (バーンダヴァの妻) が連れ出され、カウラヴァの宮廷で辱めを受けたとき、すべての王たちが沈黙する中で、唯一声をあげて止めようとしたのがヴィカルナ。「彼女はバーンダヴァたちの妻であり、王族の姫であり、しかも人間だ。 どんな理由があろうと、彼女を辱めるのは義 (ダルマ) に反する！」と声をあげた。 兄ドゥルヨーダナは怒り、王たちは沈黙を続け、ヴィカルナは「声は届かなかったが、心では義を買いた者」として人々の記憶に残る。</p>